市原市小谷田八木遺跡の弥生式土器

藤崎 芳樹

本資料は口縁部を欠失しており、現存高31cm、
底径7.7cmを測る。胴部最大径（26.8cm）が中心
より上位にあり、頸部（径12cm）が細いため、更
に器高、最大径に比して底部が小さいため、胴下
半部から急にすばり、やや肩の張った長胴の感
じを受ける。全体の器形は、僅かに残存する頸部
から、直線的に延びる筒状の頸部を有し、口縁が
やや外側に開く、器高45cm前後の細頸壺形土器と
考えられる。

文様は幅4～5mmの押捺の浅い沈線、縄文等で
構成され、頸部文様帯、胴部文様帯に分離されて
いる。頸部と胴部の文様帯は2条の沈線により画
されており、頸部文様帯は文様構成、卑文等の詳
細は不明であるが、3条の沈線が縦方向に延び、
胴部文様帯との境に文様を構成する1条の沈線が
横走している。なお、縦区画と横区画の沈線の集
合部には中央部が僅かに凹む場所が透かされている。
胴部、すなわち胴上部に認められる文様帯は基本
的には同心円文により構成されている。同心円文とはいうもの、「Ω」形断線が二重に巡り、連
繋しているもので、その中に円文が施され、最
も外側は上向きの弧線文が配されて同心円文を強
調している。なお、弧線文谷部は縦方向の沈線に
より重複文様带と接合している。地文の絵文は施
文原体L・Rであり、横軸絵文を基調とし、消え
ている部分も存在するが、故意によるものではない。
縦文の絵文は器面をある程度乾燥させた後と
考えられ、器面への押しつけは薄く、また、絵文され
た原体の条は1 cm当たり3条認められる。胸部文
様帯以下は中部から5 cm程度は縦方向（下～上）
にヘラ削りが2段に認められ、このヘラ削りは胸部
の一部において縦方向に小石の動きが認めら
されることから、ある程度器面全体に行われたと考
える。更にその上に条文（注２）による最終
の器面調整が行われる。この器面調整は1回の施
文の幅が1 ～ 3 cm程度であり、この中に2 ～ 3条の
幅1 mm前後の絵文（？）が認められるが、施文幅
内部も僅かに凹みが数箇認められる。胸部文様帯
付近は横方向の上向きの弧状を呈し、最大径付近
は横方向または左上～右下の方向、更に最大径以
下は左上～右下を基本の方向とする。全体の絵文
方向は下～上、左→右であり、胸部文様帯付近の
押しつけが他に比して深い。底部は器面の磨耗が激し
く、剥落しているが網代痕と考えられる。内面は
剥落が著しいが、胸部部はやや凹凸が目立ち、胸
下部はナデによる調整が認められる。器壁の厚さ
は6 ～ 7 mmで、円盤状の底部に積み上げて成形し
たものであり、底部内部は僅かに尖底をなし、平
坦面は見られない。
上記の文様、調整はヘラ削り→ DISTRIBUTION → 縄文→沈
線区画の順で行われ、胸部文様帯は7単位である。

III
本資料は耕作中に偶然発見されたものであるが、
発見者の話によれば当時の模様は次のようなである。
昭和51年頃、畑地に根切り用の溝を掘っていた
折、土器を発見したため土器の検出に務め、地表
より1 m程掘り下げて取り出した。土器は直立し
た状態で出土し、発見時は完全な形状を留めて
いたが、数年間周辺に放置しておいた際に壊れて
しまったようである。土壌の中に「白っぽいも
の」が入っていたため、取り出して土と一緒に近
くの墓地に埋めてしまったという。なお、周辺の
畑地はローム層までの深さが50 cm程度のようである。

IV
上述したように本資料は発見時の様子から再葬
墓から出土したものと考えられ、文様、形式等も
関東地方近辺に見られる弥生時代中期前方半の特徴
を備えている。
近年、弥生時代中期須和田式土器は久しく待ち
望まれた出雲原遺跡（注3）の報告でA類、B類に
細分されたが、壱形土器に限っては両者の相異
を剥き出しの有無に強く求めている（注4）。この分
類に従えば、本資料はB類に属する。すなわち、
本資料の胸部文様帯は円形文とそれを取り巻く
「Ω」形文、更に上部から補完する弧線文により
構成されるが、習匠文自体は単純なものである。
変形工字文に祖元が求められる菱形連繋文、三角
連繋文は1条の沈線で描けるものを2 ～ 3条と多
重に描くものであるが、それら以外の一見複雑に
見えるこの時期の文様は基本となる単純な文様で
円形文、四角文等とそれを見復する文様として構
成されている（注5）。
本資料は所謂須和田式土器に属するが、文様、
調整、形式等から天神前遺跡（注6）の中段階に
類例を見い出すことができる。

（1班・長浦上総事務所）
千葉市矢作貝塚出土の紡錘車形石製品について

石倉亮治

千葉市矢作貝塚は縄文時代後・晩期の貝塚として知られており、昭和55年千葉県水道局の水道記念館建設に伴いその一部が千葉県文化財センターにより調査された（註1）。縄文時代の遺構、遺物のほかに弥生時代末及び古墳時代後期の住居址も検出されたが、今回紹介する紡錘車形石製品はその中の鬼高期の住居址003号社の掘乱中より出土した。すぐに報告書において紹介すみであるが、遺跡の性格上縄文時代の遺構、遺物に主眼が置かれたため、本品に関する記述は簡略なものであった。そこで、以下に述べるような本品の重要性に鑑み、調査担当者の了解を得て、改めてやや詳しく観察と検討を加えてみることとした。

紡錘車形石製品に関する考察は、大正8年高橋健生氏の『古墳発見石製模造器の探究』が最初である。高橋氏は石製模型の鏡としての分類を示された。その後、伊藤信雄・伊藤幹三父子により巴形石製品をも含めて16ヶ所の古墳を中心にとする出土遺跡の集成がなされた（註2）。次いで岩崎卓也氏により31ヶ所の遺跡の集成がなされ、そのなかで山口県長光寺古墳と東京都宝陵山古墳を削除された（註3）。さらに穴沢八光・西岡秀雄両氏により集がなされ、再び東京都宝陵山古墳が追加